

業界激変!

キャリア選びの
プロバイダー &
新基準

【プロバイダーにまつわるこれだけの誤解】

- ・スピードのボトルネックはプロバイダー?
- ・プロバイダーは設備産業?
- ・コンテンツ・課金・コミュニティーは補助的サービス?

「プロバイダー(ISP)」といえば、インターネットへの接続回線全般を用意し、その上でいろいろなサービスを提供し、インターネットを使うには必ず加入しなければならない事業者というイメージではないだろうか。しかしこれは従来型にすぎず、現在のプロバイダーはその形態や役割を大きく変えている。そこで、現在の「プロバイダー」に着目し、プロバイダーが果たす機能を再確認しよう。またこの記事で、プロバイダー選びにも新たな基準が生まれていることを認識してほしい。

Text: 石田慶樹(P100 ~ P103) 坂本仁明(P104 ~ P105) 石田卓也(P106 ~ P107) 編集部

商用化から10年
プロバイダーの分化が進む

日本に商用インターネットプロバイダーが誕生して10年が経った。この間に、誰もがどこにいても使えるようなサービスにまで発展してきた。またこの10年でプロバイダーも大きく変化を遂げている。

この変化の要因でとくに大きな出来事は、1996年のNTTによるインターネットサービス(OCN)の開始、2000年のNTT東西によるフレッツサービス(地域IP網)つまり常時接続サービスの開始、そして2001年のYahoo! BBによるADSLサービスの開始ということになるだろうか。

OCNの開始によりインターネットのサービスをすべてNTTグループのみで提供できるようになった。これを受けて他の第一種電気通信事業者も相次ぎプロバイダーサービスを始めた。それまで全国展開のためにはバックボーンを構築しなければならなかった従前のプロバイダーと一線を画し、全国規模のプロバイダーがほぼ同時期に複数誕生したのである。

フレッツサービスの開始は、プロバイダ

ーからすると、アクセス網とそれに付随する機器設備からの乖離もしくは解放を意味するものであった。そして、最後に挙げたYahoo! BBによるADSLサービスは競争の激化と価格破壊をもたらした。

これらの出来事によりプロバイダーの形態の分化が進んだ。大きく分けると2つの形態があり、Yahoo! BBのように、アクセス網の用意から国内バックボーンの構築、他のプロバイダーや海外との接続性の確保、さらにはコンテンツの提供というように何から何まで自社で用意する垂直型が一方の典型的な形態である。他方、アクセス網、国内バックボーン、外部接続、さらにはコンテンツというように、プロバイダーに必要な機能を部品化し、その一部分のみを提供する水平型がもう一方の形態である。後者の形態をとるプロバイダーには、さらに部品を提供する側と提供される側の両方があり、提供される側はいわばバーチャルなプロバイダーとなる。

今後、利用者のアクセス網の光ファイバー化が本格化すると、プロバイダーの部品化の動きをさらに加速するだろう。それというも、大多数のプロバイダーは個別

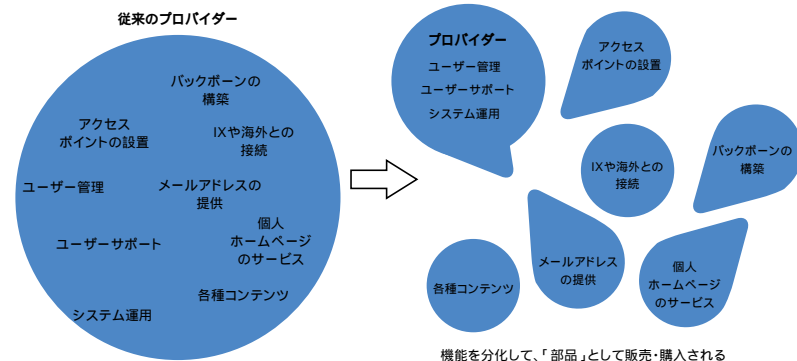
に光ファイバーの敷設はできず、光アクセス網を提供する事業者のサービスを利用せざるを得ないからである。

回線・機器・設備・人員を揃えたプロバイダーの仕組みが変わる

ある地域で、プロバイダーサービスを開始しようとする場合を考える。まずユーザーのためにアクセスポイントを設置する必要がある。アクセスポイントにはユーザーの接続を収容する回線と機器を用意する。ユーザーからのアクセスを外部のネットワークに中継するための“バックボーン”を構築しなければならない。さらに、自プロバイダーの外に出る接続がないとインターネットにはならない。だから外部接続のためのIX(インターネットエクスチェンジ)や海外接続のための機材を用意する。ユーザーの利用に対して適切に課金するためにはユーザー管理が不可欠である。またユーザーに電子メールやウェブスペースのサービスを提供するための規模に応じた設備や機器を準備しないとイケない。さらに、ユーザーサポートのための人員も必要になる。もちろんサービスを安定して運用するためのスタッフも必要だ。

プロバイダーの商用化が始まってしばらくの間は、例外はあったにせよ、ここに挙げたような回線や機器や設備や人員は、すべて自分たちで準備して構築・運用しなければならないと考えられていた。つまりプロバイダーとはサービスを提供するのに必要な設備と人員を保有する設備産業だったのだ。しかし、最近になって、その状況は大きく様変わりしてきている。先に述べたようにプロバイダーの機能が部品化され、その部品を他の事業者へ提供、つまり卸している事業者が存在するようになってきたのである。今の時代プロバイダーはすべてを用意しなくてもサービスを開始できるようになっているのだ。つきつめれば、何も用意しなくても、明日にでもプロバイダーサービスを始められるのである。

プロバイダーの役割の変化



部品購入でプロバイダー事業を運営する

NTT東西が行っているフレッツサービスは、ユーザーからのアクセスの収容をプロバイダーに代わってNTT東西で代行して行うものである。とくにYahoo! BBとの対抗でフレッツ・ADSLサービスが全国展開されてからはプロバイダーの機能の中で大きな比重を占めるようになってしまっている。

プロバイダーがフレッツサービスを利用すると、ユーザーのアクセスは網としてNTT東西によってまとめられて、ある程度まとまったところで引き渡される。この引き渡されたものを、そのままNTTコミュニケーションズやその他の長距離通信事業者によって本拠地まで回線のままで持ってきてもらうと、各地に機器や設備を設置する必要もなくなる。また回線も従来のATMのような電話系の回線ではなく、LAN技術の延長上にあるイーサネット回線で引き渡してもらえば、建物内の接続とほとんど変わらない。

さらには、各地から本拠地への集約についても、個別のプロバイダーに代行サービスを提供している事業者もある。NTTPCコミュニケーションズ、グローバルソリューション(ヴェクタント・グループ)、フリービットなどすでに数社が存在しているが、一般ユーザーからはその存在は見えにくい。

外部接続の中でも海外との接続においては、一時は外資系の通信事業者やプロバイダーが中心的役割を果たしていたが、米国の通信事業不況による事業の撤退や縮小が余儀なくされたため、この不況の影響を受けることの少なかったKDDIやNTT/Verioなどがその重要度を増している。

国内の他プロバイダーとの接続も、IXに自ら接続しなくても、同様の効果が得られるようなサービスを提供するBBX(ブロードバンドエクスチェンジ)や日本デジタル配信といった専門の事業者も存在している。ユーザーサービスの機能についても、メールボックスやウェブスペースに関するサービスを専門に卸す会社も存在しており、はてはユーザー管理ならびに課金も他の事業者から部品として購入することができる。これらの部品を購入して自らの負荷を減らす流れが一方に存在する。

しかし、こういった風潮に逆らいすべてを自らの手で行っているところもある。その中でもっとも目立つプロバイダーはYahoo! BBだが、それ以外にも各地にある独立系のCATVインターネットサービス会社は国際接続を除いて自らの手でサービスを組み立てている場合が多い。しかしながら、まだ表面化してはいないが、大手や準大手プロバイダーにも、すでに他社からプロバイダーの部品を購入し、自力で行っている事業をどんどん少なくしているところも実は存在している。

プロバイダーの位置付けを把握する

プロバイダー機能の分化で「品質」の比重が大きいアクセス網

プロバイダー機能が分化されることで、今までプロバイダーが提供してきたインターネットサービス全体までが1つの部品となり、この全体を購入して別の看板を掲げる事業者が登場している。この場合、この部品を卸した事業者と新たに看板を掲げたプロバイダーとはサービスの実態は同じで、結果的に品質も同じはずだ。それを考えると、プロバイダーの品質の評価とは一体何を意味するようになるのか。

プロバイダーの品質は、本来そのプロバイダーがすべて責任を負うのが理想である。従来型のすべての機能を自ら果たしているプロバイダーの場合では、品質とはそのプロバイダーの品質と完全に等しい。しかし、他社の提供する部品を購入してプロバイダーを構成している場合には、プロバイダーの品質としてユーザーが評価しているものは、実はアクセス系なのか、バックボーン系なのか、それとも外部接続

系に由来するものかを注意深く考えなければならぬ。さもないと、品質に不満があるプロバイダーから別のプロバイダーに乗り換えたとしても、不満の原因が共通の部品にあるとすると、乗り換えたところで期待していた効果が得られるとはかぎらないことになる。

インターネット接続への品質という意味では、アクセス網が非常に大きな鍵を握っている。このアクセス網としてはいろいろなバリエーションもあるが、基本的には光ファイバーと銅線のいずれかである。

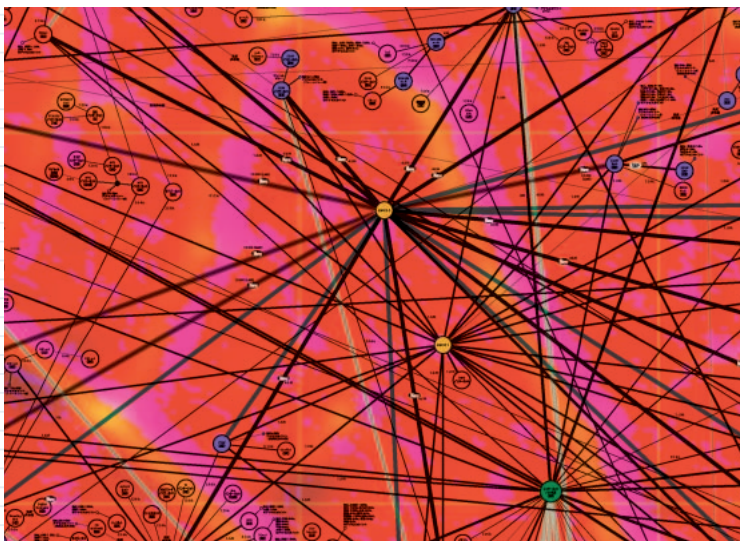
銅線でADSLの場合にはアクセス系を提供しているのは、大きく分けるとYahoo! BBかNTT東西のフレッツ・ADSL、あるいはこれ以外の独立系だ。Yahoo! BBあるいは独立系のADSLの場合では、自らの設備をアクセス網が収容されている電話局に設置している。フレッツを利用する場合は、電話局の先にあるNTT東西の地域IP網内で複数のユーザーが集約されて、そこからプロバイダーに接続される。回線品質に不満がある場合、たとえばこ

こで混雑が生じている可能性もゼロではないのだ。

光ファイバーの場合も事情はほとんど変わらない。実際にユーザーの家まで配線してくれるのは、現状ではNTT東西が電力系、あるいは独立系の有線ブロードネットワークスまたは各地域にあるCATV会社のいずれかだ。NTT東西の場合にはフレッツ・ADSLと同じく、いったんNTTの地域IP網内を経由することになる。電力系については、地域によりあるいは会社によって、すべてを提供するサービスと、アクセス網を部品として提供するサービスのいずれもが存在している。有線ブロードネットワークスはYahoo! BBと同じ形態のすべてをまかなうサービスを提供している。CATVは独立でサービスを提供している場合が多い。

光ファイバーにしる銅線にしる、アクセス網の選択が、実はプロバイダー選択の大きな分かれ目になっていることを、プロバイダーの品質を評価するにあたってはこれまで以上に重視しなければならない。

1996年当時のプロバイダーの状況



NSPIX2ができた当時、1996年10月のプロバイダーのバックボーン状況。当時は大手プロバイダーは全国に拡大しており、相互接続はNSPIX2で行われていた。中央上の黄色い円がNSPIX2(インターネットマガジン1997年1月号のプロバイダーマップより)

プロバイダーの役割が 大きく変化する

アクセス網が重要だとなれば、ユーザーが直接契約しているプロバイダーは一体どのような機能を果たしているのだろうか。

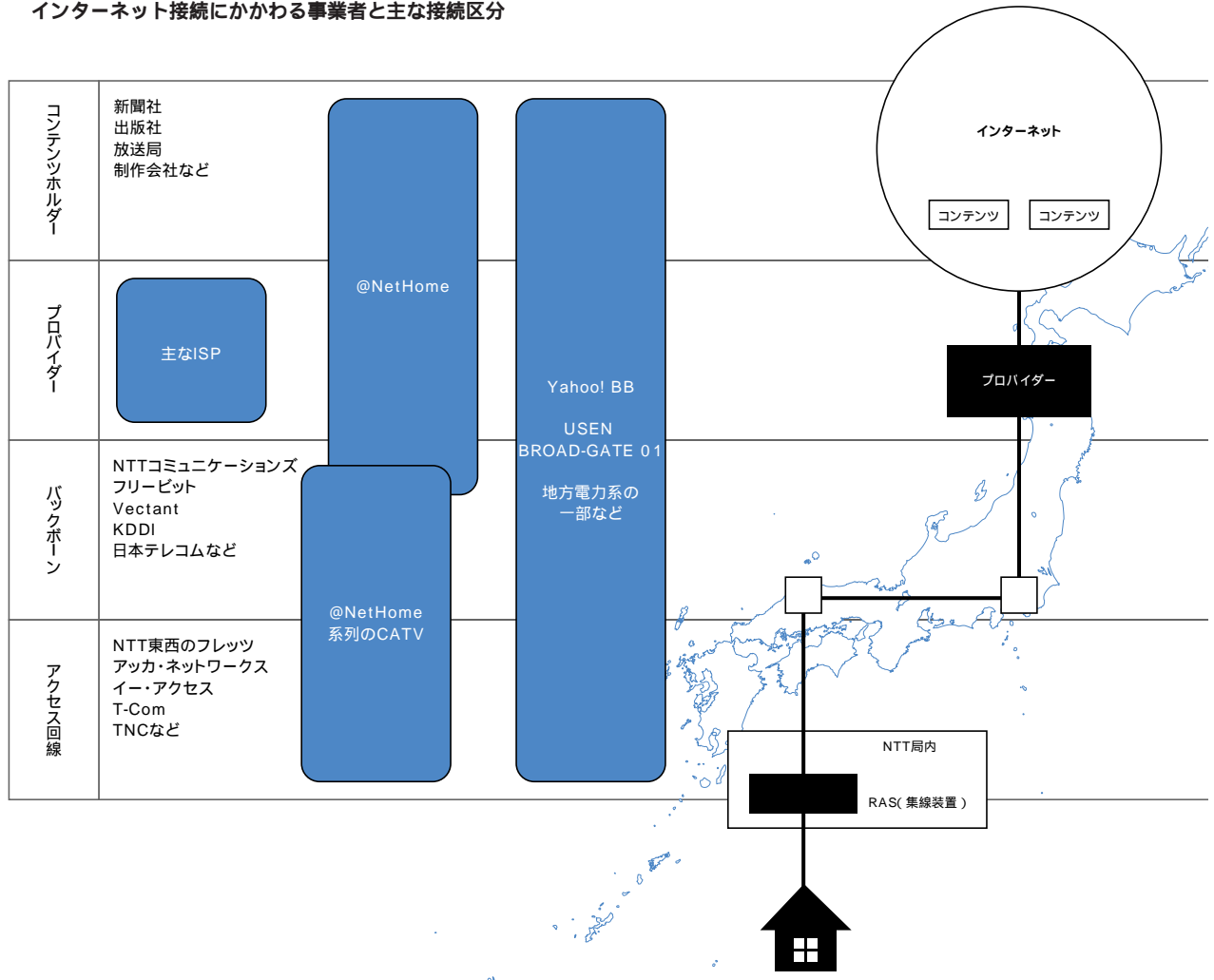
プロバイダーはその役割が実は変化しつつあることが、最近の動きを見ていると徐々にではあるがわかってくる。たとえば各プロバイダーがサービスを開始しているIP電話は、複数のプロバイダーがIP電話に関する合従連衡を行っているかに見える。しかしアクセス網という視点で整理するとこの動きは比較的クリアなものである。つまり、プロバイダーの違いよりも、

アクセス網の違いのほうが実はIP電話サービスの違いに直結しているのである。そして、今のままの状況が極端にまで進行すると、ひどい場合には同じプロバイダーのユーザー同士でも、アクセス網の違うユーザーとは、同じIP電話サービスを利用していながら通話できなくなる可能性がある。これは、実際にサービスが普及していく過渡的であつて一時的な状態で、そのうち収束するとの楽観論もあるが、現実問題としては混乱の発生は免れない。しかしそれにもかかわらず、ユーザーでこのことに気づいている人は多くない。

ここに来て、大手プロバイダーまでもがアクセス網やバックボーンやさらには接続

サービスを手放し、資源をユーザーコミュニティの形成やコンテンツの提供へシフトして、ユーザーの困い込みに躍起になっているかのようにも見える。この形態はパソコン通信のサービス提供者の姿を彷彿させる。パソコン通信はもはや過去のものではあるが、ビジネスモデルとしては密かに生き続けているのだ。社会的にも業界的にも不景気な時代の中で、先祖返りしようとするプロバイダーが生き残るのか、すべてを提供し続ける従来型のプロバイダーが生き残るのか、それとも新たな道を模索するプロバイダーが今後現れるのか、プロバイダーが激動する時代はまだしばらく続きそうである。

インターネット接続にかかわる事業者と主な接続区分



回線スピードのボトルネックを調査する

接続点を意識して自分の最大回線スピードを洗い出す

モデムやTAに「9600bps」「64K」などと書かれ、プロバイダーにダイヤルアップで接続することがあたりまえだったころ、私たちの関心はダイヤルアップしたときに「話中」にならない「電話やISDNでつながりやすいプロバイダー」を選ぶことだった。

深夜帯には、大都市の電話番号はいつも混雑しているからと、わざわざ地方のアクセスポイントに電話をかけている知り合いもいた。「話中」はそのぐらい深刻な問題で、本誌でもプロバイダー話中度調査を行っていたくらいだ。当時、多くの読者にとってプロバイダー選びの参考になったことだろう。またプロバイダー側も、アクセスポイントの混雑具合をウェブサイトで公開することが一般的だった。

しかし時代は定額料金・常時接続となり、8M、12M、あるいは100Mという「回線スピード重視」の時代となった。そうはいっても、これらの表示は回線スピードを保証するわけではなく、同じ名前の接続サービスを利用しているユーザー同士で比較しても、その回線スピードはマチマチだ。

回線スピードは、ブラウザでネット上を散策しているときのレスポンスタイムやメールに写真やプレゼン資料といったファイルを添付して送受信するときに体感する。回線スピードをできるだけ速くしたいと思うのが人情というものだ。

そこで、話中度調査ほど明確に提示できないが「プロバイダー選び」の参考として、回線スピードのボトルネックがどこにあるかを調べてみる。今回は、なるべく利用者自身に近いところで「最大」のスピードを測定し、そしてインターネット上の他のプロバイダーにあるサイトでも測定。それぞれの結果を比較する方法を紹介する。

調査1: 複数のスピード測定サイトを使ってボトルネックを調べよう

インターネット上の「ボトルネック」の可能性として、アクセス回線部分やプロバイダー自身のバックボーン、プロバイダー同士の接続点などが考えられるが、なんといってもアクセス回線スピードをしっかり調べておきたい。

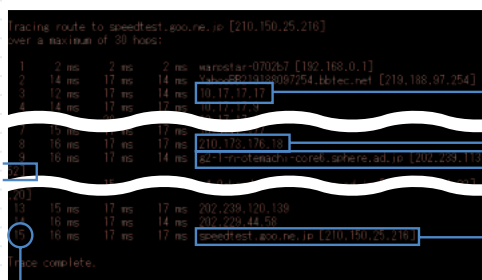
利用しているプロバイダーのスピード測定サイトか、インターネット上にある複数のスピード測定サイトを使って、アクセス回線の「最大」スピードを推定する。

続いて、traceroute機能(たとえばウィンドウズではtracertコマンド)を利用して、それぞれのスピード測定サイトまでのインターネット上の経路を確認しよう。下のよう、パケットの往復時間とIPパケットが通過したルーター名(またはIPアドレス)が表示される。これでスピード測定サイト

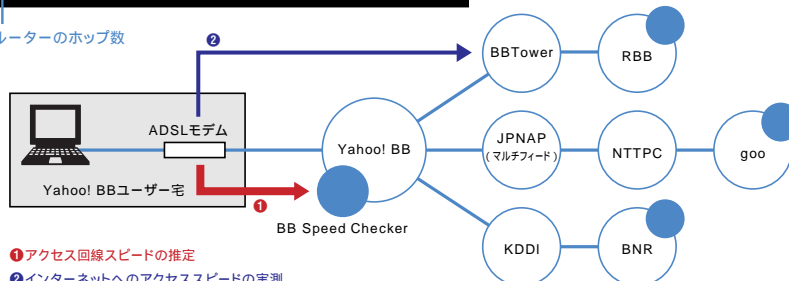
のあるサーバーまでの、IPパケットが通過するルーター数と往復時間を調べられる。ちなみにtracerouteで得られた結果のIPアドレスは、ウェブサイトの「whois」などを利用すると、そのIPアドレスの利用者(プロバイダーなど)がわかる。

複数のスピード測定サイトへのtracerouteの結果を利用して、下図のような経路を調べておくと、「インターネットに接続できない」「いつもよりスピードが遅い」と感じるような場合に、その原因を調べる手段としても利用できる。

もしtracerouteの往復時間に「***」と表示されて結果が普段どおりに表示されないときは、ネットワークの故障も考えられるので、プロバイダーに問い合わせてみよう。



ルーターのホップ数



① アクセス回線スピードの推定

② インターネットへのアクセススピードの実測
スピード測定サイト

ここでは、Yahoo! BBが用意する測定サイトでの結果①を自分の最大スピードとして、他のサイトにアクセスしたときの速度②と比較している。これらの値が、Yahoo! BB自体のネットワークが混雑しているか、あるいはインターネットが混雑しているかの指標になる。

調査2：フレッツユーザーは複数のプロバイダーを試してみよう

NTT東日本、西日本のフレッツサービスを利用している場合は「フレッツ・スクウェア」にあるスピード測定を使い、自分の環境での「最大」として期待できるスピードを確認しよう。

右図のように「フレッツ」では、ISDNやADSL、光ファイバーなどのアクセス回線で接続された利用者を、地域IP網と呼ばれるネットワーク経由でプロバイダーに接続している。このとき考えられる回線スピードのボトルネックは、アクセス回線、地域IP網、そしてプロバイダーと地域IP網との接続点だ。「フレッツ・スクウェア」を利用してスピードを測定することで、アクセス回線と地域IP網までの回線スピードの「最大」を推定できる①。

そして、「フレッツ・スクウェア」で測定したスピードを念頭に置きながら、自分が契約しているプロバイダーと接続し、gooやRBBなどが用意するスピード測定サイトで、回線スピードを測定してみる②。

この2つの測定結果に大きな違いが見られる場合には明らかにプロバイダーと地域IP網との接続点がボトルネックになっているので、試験的に他のプロバイダーと契約してみることも一考したい。

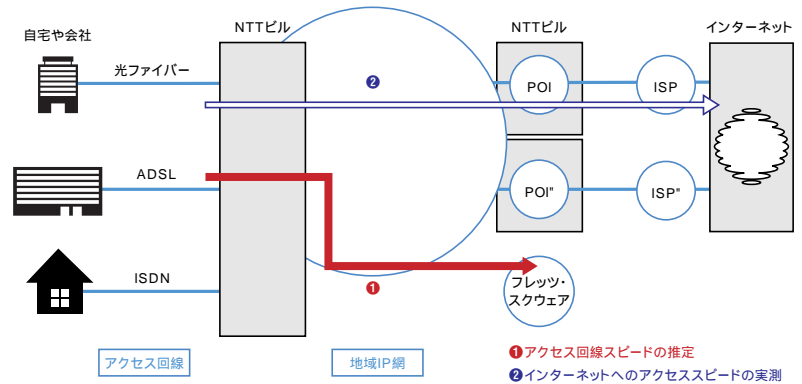
フレッツをアクセス回線として利用する場合のメリットとして、利用シーンに応じて、自由にプロバイダーを選択できることが挙げられる(1本のアクセス回線の契約で複数のプロバイダーに加入できる)。プロバイダーのサービスが毎年進化していくなかで、複数のプロバイダーのサービスを比較しながら、自分に最適なプロバイダーを選択できるのだ。

またプロバイダーによっては、ぷららのように接続点での混雑状況を公開しているので、このような情報も参考にするといいだろう。

「フレッツ・スクウェアの接続方法」

<http://www.flets.com/square/>

地域IP網を経由したプロバイダーへの接続



ここでは、フレッツ・スクウェアで測定した結果①を自分の最大スピードとして、インターネット上の測定サイトにアクセスしたときの速度②と比較している。これらの値が、フレッツ網が混雑しているか、あるいはインターネットが混雑しているかの指標になる。



プロバイダーの中でも「ぷらら」は、地域IP網との接続点での混雑具合を都道府県別に公開している。プロバイダー選びに利用するのはもちろん、自分が利用する時間帯での状況を確認するためなどに、とても参考となる情報だ。

【参考】スピード測定サイト

- RBB TODAY
URL <http://speed.rbbtoday.com/>
- BNRスピードテスト
URL <http://www.musen-ian.com/speed/>
- BB Speed Checker
URL <http://speedchecker.bbtec.net/>
- gooスピードテスト
URL <http://speedtest.goo.ne.jp/>

双方向のインターネットは「上り」にも注意!

アクセス回線がISDNや光ファイバーの場合、回線スピードは双方向とも同じであるのに対して、ADSLとCATVでは、上りと下りの回線スピードが異なる。

そこで、自宅にウェブサーバーやメールサーバーを設置しようという場合はもちろん、ファイルを添付したメールや、ウェブホスティングサーバーにデータを送信する際などにも、「上り」の回線スピードもしっかり調べておきたいものだ。

テストデータの受信にかかる通信時間を計測することで、下りの回線スピードを測定するスピード測定サイトが多いなか、RBBやBNRのスピード測定サイトでは、「上り回線のスピード」も測定できる。

この測定法は、まず「上り」測定の準備として、自宅のパソコン側に送り込まれたテストデータを、実際の測定時にパソコン側から送信するといった工夫によって実現されている。

プロバイダーが選ぶ最良のサービス

サポート & 機能強化で 顧客離れを防ぐ

前述したようにプロバイダー機能は分化した。そこで、ブロードバンドやユビキタスへの対応、IP電話やメールサービスの充実など、各社しのぎを削ってサービスの向上に努めている。また、顧客の視点に立ったきめ細かなユーザーサポートなどに注力するプロバイダーも増え、これまで法人向けのみを提供していたサービスを、低価格で個人向けに提供するケースも登場している。プロバイダーが生き残りをかけて積極的に展開する表立ったサービスと、その内容をここで整理してみよう。

自由に意見交換できる場を広く提供

コミュニティーサービスの強化

2ちゃんねるなどの無料掲示板やインスタントメッセージなどが普及し、個人がメッセージを交換し合う場、コミュニティースペースの利用が盛んになってきた。プロバイダーもコンテンツの1つとしてこうした場を用意しているところが多い。パソコン通信時代から続く@niftyのフォーラムや、会員同士の出会いの場を提供するものから運営者側との話し合いの場まで、規模はさまざま。なんらかの問題が発生してもプロバイダーに相談できるので、外部のスペースより安心して使えるのがメリットだろう。また最近では、ビデオチャットや携帯電話で利用できるスペースも増えている。



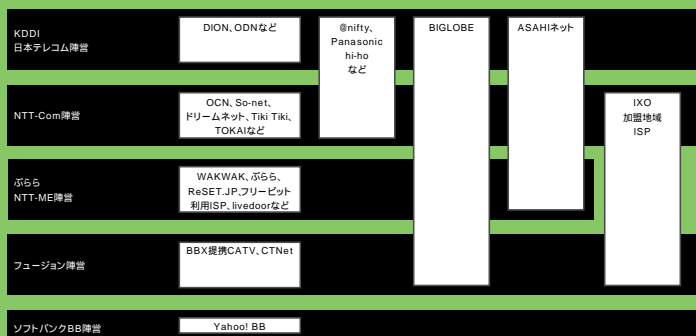
OCNのコミュニティースペース「OCN Cafe」では一部の機能が携帯電話でも利用できる。

URL <http://cafe.ocn.ne.jp/>

利用者間通話の無料と国内一律料金が魅力 IP電話サービスの開始

プロバイダーが今もっとも力を入れて取り組んでいるのが、IP電話だ。ブロードバンド環境のユーザーならば、使用できるプロバイダーが急増している。現状では、同一プロバイダーのユーザー同士でないと無料通話などのメリットが得られないことも多い。先行するYahoo! BBのBBフォンをはじめ、NTT東西のフレッツサービスに使えるIPフォンや、ヤマハのIP電話対応ルーターなど、機器に関しては出そろいつつも、一部を除いて互換性はなく、いくつかの陣営に分

かれている状況なので、日本全国一律料金での通話や海外への格安通話のみが魅力となり、頻繁に固定電話を利用して高い通話料金を頭を悩ませていた一部のユーザー向けという感じだ。しかし、この夏に予定されている一般固定電話や携帯電話との相互接続を前にして、各社の連携がにわかに進み、提携プロバイダー同士の無料通話を視野に入れた「大連合」が誕生している。これからの無料通話の範囲や利用状況などを慎重に検討して判断したい。



豊富な品ぞろえも差別化が難しい コンテンツ 提携の動き

ブロードバンド化で、動画も気楽に見られるようになり、プロバイダーの自前サイトに載るコンテンツの善し悪しも重要視されつつある。高画質な画像や動画を、新聞社や出版社などのコンテンツホルダーから購入したり、他のプロバイダーと提携したりして、接続会員やコンテンツ専用の会員に公開している場合が多い。外部のよいコンテンツを取り込むことは、コンテンツ数を増やし、自社の作業効率を高めてリスクを最小限に抑えられるメリットがある。



So-netが@niftyに提供したコンテンツ「Chocolat」
URL <http://www.nifty.com/chocolat/>

FTTHやモバイル環境での利用を見越す アクセス手段の拡充

インターネットへのアクセス方法も多種多様化が進んでいる。住んでいる地域によって、またはモバイルなど家以外からのインターネット接続方法によって、最適なアクセス手段を選択したい。アクセス回線を変更したい場合でも即座に対応できるように、全国区のプロバイダーではアクセス手段の選択肢が多いにこしたことはない。ブロードバンドでは、今年はADSLからFTTHへの移行が進むと推測されている。一口にFTTHといっても、NTT東西のBフレッツをはじめ、東京電力のTEPCOひかりや関西電力系ケイ・オプティコム、eoホームファイバーなどの電力系や有線ブロードネットワークスのBROAD-GATE01など足回り回線はいろいろな選択肢がある。また、地域系プロバイダーの中には第一種電気通信事業者から借り受けたファイバーをアクセス回線として提供するなど、独自のサービ

スを提供しているところもある。また、最近ではモバイル環境にも変化が見られる。DDIポケットの定額データ通信サービス、AirH[®]に対抗するNTTドコモグループの@FreeX(アットフリード)が4月から開始された。価格が高いのが難点だが、これからの競争に期待したい。ブロードバンドとモバイルの両方の長所を併せ持つ、無線LANスポットも急増している。Mフレッツメイトやフレッツ・スポットのようにNTT東西のフレッツサービス加入者でなければ使えないものも一部あるが、NTTコミュニケーションズのHOTSPOTやJR東日本の「無線による、駅でのインターネット接続実験」のように対応のプロバイダーに加入していると簡単な手続きで利用できるものもあるし、無線LANの海外ローミング、iPASSなどに対応するプロバイダーも急増している。

景品やマイルに交換できる ポイント制度の 導入

航空会社やカード会社が行っているような使用頻度に応じたポイント還元の仕事を用意するプロバイダーも増えてきた。1997年に業界で初めてポイント制度を導入した@niftyをはじめ、BIGLOBEやDIONなどがそれぞれの方式で景品との交換、航空会社のマイルへの交換、提携企業のポイントとの交換を行っている。今までと変わらずインターネットを使うだけでポイントが加算されているなど、概ね好評のようだ。

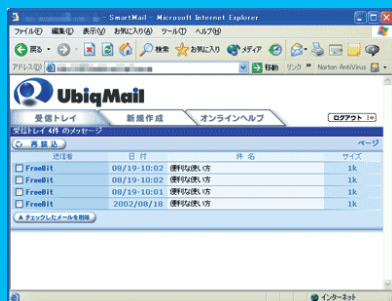


会員ならとくに意識することなくポイントが貯まる。ただし、有効期限には注意しよう。

迷惑メールやウイルスも事前に除去する メールサービスの充実

昨年7月、事前の同意を得ていない広告に関しては電子メールの件名に「未承諾広告」と表示することが義務付けられた。携帯メールなどでこれらを受け取らない設定している人も多いと思う。このような広告の除去やドメインによる指定受信・拒否、サイズや送信元による携帯電話への転送設定などができるプロバイダーが増えてきた。迷惑メールに悩むユーザーや特定のメールを早く読みたいビジネスユースの人には大きなメリットになる。迷惑メールと同様に受け取りたくないのがウイルスメールだ。フリーメールなどでは駆除対応で

きないところが多いが、プロバイダーはほぼ対応を終え、会員向けには無償のところすらある。常に最新のパターン(定義)でチェックしてくれるので安心してメールを使える。常時接続環境において便利なファイアウォール機能をセッとしたプロバイダーも登場している。ほかにも、ブラウザや携帯電話、PHS、Palmなどからメールを読み書きできるウェブメールや、家と会社など複数端末からのメールの確認に便利なIMAP4への対応、追加メールアドレスの簡単な申し込み、電子証明書の発行などが展開されている。



ReSET.JPや提携ISPで使われているウェブメール「UbiquMail」
URL <http://www.reset.jp/customer/guide/ubiqmail/>



IJmioでのメールのフィルター設定
URL <http://www.ijmio.jp/>

固定IPアドレスやストレージサービス 法人向け同等の サービスも登場

高価な法人向けコースにのみ用意されていたサービスを個人に向けて安価に提供するプロバイダーが増えてきている。その代表といえるのが固定IPサービス。個人でも8個など複数のIPアドレスを取得できるようにしたり、逆引きでも独自ドメインを使用できるようにしたりするなどきめこまかなサービスも多い。個人やSOHOでウェブやメールなどのサーバーを自前で公開していたり、業務などでIPSecなどのVPNを構築したり、IPアドレスでのアクセス制限を使ったりする場合にはぜひとも欲しいサービスだ。また、ほかにもストレージサービスやダイナミックDNSなどのサービスも使えるようになってきている。

プロバイダーが語る 今後のサービス展開

主に個人向けのブロードバンドサービスにおいて業界を主導する13社にアンケートをお願いし、その回答をここにまとめた。プロバイダー機能が分化するなかで、プロバイダーの現在と今後の方向性が、回答から垣間見られるに違いない。なお、アンケートは5月中旬に実施した。

@NetHome



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1		2	11	
	2		2		3	12	
	3		3		4	13	
3	1			8		14	
	2		5	9	1		
4		6			2	一部	

Q2

VoIP技術を活かした「ケーブルトーク」を本年、提供開始します。本当に使いやすい電話サービス、つまり、いつ誰とでも簡単につながる、長時間の通話でも低料金、妥協しない品質、全国同一サービスを安定したケーブル環境で実現します。

Q3

会員サポート(サービスの安定性)

@nifty



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1		2	11	
	2		2		3	12	
	3		3		4	13	
3	1		4	8		14	
	2		5	9	1		
4		6			2		

Q2

@niftyは、お客様の安心・安全を第一に考えたインターネットサービスを提供していきます。6月からは総合セキュリティサービス「@nifty BBセキュリティ」の開始を予定しています。

Q3

会員サポート

BIGLOBE



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1		2	11	
	2		2		3	12	
	3		3		4	13	
3	1		4	8		14	
	2		5	9	1		
4		6			2		

Q2

BIGLOBEでは、映画会社などエンターテインメント事業者との関係を強化し、映画の予告編配信、特典映像の配信、オンラインの鑑賞券販売、オンラインのグッズ販売、DVD販売など、EC事業にますます力を入れていきます。

Q3

サービス内容の充実

DION



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1		2	11	
	2		2		3	12	
	3		3		4	13	
3	1		4	8		14	
	2		5	9	1		
4		6			2		

DIONとしてはなく、KDDIとして

Q2

au、DDIポケットなどの関係会社との連携サービス、ADSLを含むブロードバンドサービス、「かけつけ設定サポート」「無線LANレンタル」などに代表されるお客様宅内ソリューション。

Q3

会員サポート

IJ4U

全サービス
(パッケージならIJ4U、機能を選ぶならIJmioを用意しているものすべてに注力するため)

Q1

1		5		7	1	10	3
2	1	6	1		2	11	光回線販売
	2		2		3	12	
	3	1	3		4	13	
3	1	2	4	8		14	4
	2		5	9	1		
4		6			2		

- 1 ネットニュース、ダウンロード版
- 2 「IJmioパーソナルドメインサービス」「IJmioシンプルDNSサービス」にて提供
- 3 IJサービスとして
- 4 DNSホスティングサービス「IJmioシンプルDNSサービス」とモバイルのみの「IJmioモバイルアクセスサービス」を提供

Q2

従来どおり、インターネットを利用するお客様の立場から考えて、特定の分野のみに特化するのではなく、すべての分野において充実したサービスの新規開発、機能拡充に注力し続けていきます。

Q3

回線スループット、サービス内容の充実、会員サポート、価格、提供地域、サービス品質などすべて

interQ MEMBERS



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1		2	11	
	2		2		3	12	
	3		3		4	13	
3	1		4	8		14	
	2		5	9	1		
4		6			2		

近日中対応予定

Q2

interQ MEMBERSでは、今後も高品質のブロードバンド接続のサービス拡大とともに、カスタマーサポート体制の強化を行い、お客様に安心してインターネットを楽しんでいただけるための環境作りを進めています。

Q3

会員サポート

OCN



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1		2	11	
	2		2		3	12	
	3		3		4	13	
3	1		4	8		14	
	2		5	9	1		
4		6			2		

Q2

お客様のニーズに合わせ、利用しやすい価格のキャンペーン展開やサービス提供をそのときどきに応じて行います。「料金」「サポート」「品質」「メニュー」すべてをOCNに任せれば安心というプロバイダーとして、今後もさまざまな方面からお客様に情報を提供していきます。

Q3

すべてを重要視していくことで「OCNに任せればすべてが安心」というプロバイダーでいつづけることを目指し、ビジネス向けOCNにとってはどのようなビジネスソリューションを提供できるかが、重要と考えております。

ODN



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1	2	2	11	
	2		2	3	3	12	
	3		3	4	4	13	
3	1		4	8		14	
	2		5	9	1		
4		6		2			

ODN会員専用メールソフト「ブーさんメール2プラス」、ADSL設定サービス、固定電話とのセット割引サービスなど

Q2 「ODN IPフォン」をさらに強化し、FTTH / ADSLなどのブロードバンドサービスやウイルスチェックなどのサービスとともに、幅広くお客様にご利用いただけるように努めてまいります。

Q3 サービス内容の充実

Panasonic hi-ho



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1	2	2	11	
	2		2	3	3	12	
	3		3	4	4	13	
3	1	1		4	8		
	2		5	9	1		
4		2		6		2	

1ドメイン取得はページ内で紹介し、取得後のサービスを提供
2ページ内で紹介

Q2 ネット家電への取り組み

Q3 VoIPやFTTHなどのサービス拡充とそれに伴う会員サポート

So-net



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1	2	2	11	
	2		2	3	3	12	
	3		3	4	4	13	
3	1		4	8		14	
	2		5	9	1		
4		6		2			

意識的に順位付けはしていない

Q2 So-net会員向け「ブロードバンドAVルータ」をホームネットワークのゲートウェイとしたサービス、また、「コクーン」と同AVルータを接続したIPv6実証実験など、ソニーとの連携を深めたサービスの拡充。

Q3 ユーザーニーズに則したサービスを提供することが重要であり、それには例に挙げた項目1つで語れません。今後はサービスの拡充に努めていながら、ソニーとのさらなる連携を打ち出し、その中でブランディングの向上を図っていきます。

USEN



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1	2	2	11	
	2		2	3	3	12	
	3		3	4	4	13	
3	1		4	8		14	
	2		5	9	1		
4		6		2			

IPカメラを利用した店舗情報の提供

Q2 弊社のサービスはFTTHを基盤としており、現段階から2003年内においてはユーザーの獲得が最重要課題です。

Q3 回線スルーブット、サービス内容の充実、会員サポート、価格、提供地域などすべて

Yahoo! BB



Q1

1		5		7	1	10	
2	1	6	1	2	2	11	
	2		2	3	3	12	
	3		3	4	4	13	
3	1		4	8		14	
	2		5	9	1		
4		6		2			

インターネットで便利なサービス、楽しいサービス、役に立つサービス、節約できるサービスなど、あらゆるサービスを提供予定

Q2 さまざまなサービスの展開を検討しておりますが、今後の展開については具体的なコメントは控えさせていただきます。

Q3 サービス内容の充実、会員サポート、価格

ぷらら



Q1

1		4		7	1	10	
2	1	5	1	2	2	11	
	2		2	3	3	12	
	3		3	4	4	13	
3	1	2		4	8		
	2		5	9	1		
4		2		6		2	

1 独自に作成しているものはなし。コンテンツホルダーからの提供
2 法人サービスのみあり

Q2 IP電話、ブロードバンド映像配信については今後大きな柱であるので継続して注力していきます。このほか、ぷららネットワークではアカウントアグリゲーションサービスのASP提供も展開しており、ユーザーの動向を見ながら、提供を拡大していく予定です。

Q3 高品質のアクセス環境を提供することは大前提となり、各プロバイダーが同様のサービスを展開する中で、各サービスのオリジナリティーと、精度の高さが求められるのではないのでしょうか。

【表の見方】

プロバイダーサービス名

Q1

以下のサービスの有無について

1	IP電話サービス	5	ストレージサービス	7	コミュニティサービス	10	法人向けサービス
2	コンテンツの拡充	6	メール関連サービス	1	フォーラム	11	オンラインショッピング
	1 ポータルサイトの提供		1 ウェブメール	2	掲示板	12	ポイント制度
	2 ブロードバンドコンテンツ		2 メール転送	3	チャット	13	スピード測定サイト
	3 その他		3 ウィルス対策	4	メッセージソフト	14	その他
3	ホームページ関連		4 迷惑メール対策	8	バックボーン回線の運用		
	1 独自ドメイン対応		5 メールアドレスの追加	9	アクセス手段の拡充		
	2 ホームページ容量の追加		6 独自ネームサービス	1	FTTH対応		
4	URLフィルタリング			2	無線LANスポット対応		

左より特に力を入れているサービス
(P.106参照)

Q2 現在または今後、特に力を入れていこうと考えている分野、サービスは?

Q3 今後プロバイダーに求められるものとして、もっとも重要なものは何か? 例)回線スルーブット、サービス内容の充実、会員サポート、価格、提供地域など



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp